

報告 痴呆性高齢者への施設環境づくりセミナー

実行委員長

児玉桂子

(日本社会事業大学教授)

1. はじめに

2004年12月11日に特別課題研究の一環として痴呆性高齢者への施設環境づくりセミナーを日本痴呆ケア学会、日本建築学会、長寿科学振興財団の協賛で開催しました。年末にもかかわらず180名(参加者150名+講演者・運営者30名)の参加をいただきましたが、会場のキャパシティーからご参加頂けなかった方々にはお詫びを申し上げます

2. 痴呆性高齢者への施設環境づくりセミナープログラム

セミナーは表1に示す理論編「施設環境づくりをすすめるために」と実践編「施設環境づくりの実践報告」から構成されました。参加者には「セミナーの抄録」と「痴呆性高齢者への環境支援指針(PEAP)を用いた施設環境づくり実践ハンドブック」を配布し、講演者はパワーポイントを用いて、各テーマ30分で分かりやすい発表が行われました。

表1 痴呆性高齢者への施設環境づくりセミナープログラム

午前の部：施設環境づくりを進めるには

司会：和歌山大学 足立啓

1. 痴呆性高齢者への環境支援指針(PEAP)を用いた施設環境づくり実践ハンドブックについて
児玉桂子(日本社会事業大学)
2. 痴呆性高齢者への環境支援指針(PEAP)について一痴呆性高齢者と環境の関連を理解するために
下垣光(日本社会事業大学)
3. キャプション評価法について一環境の課題を捉えるために一
古賀誉章(東京大学大学院)

午後の部：施設環境づくりの実践報告

司会：日本社会事業大学 児玉桂子 岩手県立大学 狩野徹

1. 都市型特養ホームでの環境づくり
鈴木みな子(浦和大学・前墨田区特別養護老人ホームたちばなホーム)
2. 築40年の特養ホームでの環境づくり
伊丹久人+加藤温子(特別養護老人ホーム四天王寺悲田院)
3. ケアスタッフと居住福祉工学研究室の協働による環境づくり
石川進+中山彰子(特別養護老人ホーム大阪新生苑)+加藤悠介(大阪市立大学森一彦研究室)
4. グループホームでの環境づくり
坂田理恵(ウイズネット・グループホームみんなの家与野大戸)

質疑応答

閉会の辞 赤木徹也(工学院大学)

進行 影山優子(日本社会事業大学)

理論編「施設環境づくりをすすめるために」では、実践ハンドブックを用いた6ステップの施設環境づくりの説明、環境づくりの視点を示す「痴呆性高齢者への環境支援指針（PEAP）」について、参加型で環境課題を捉える手法である「キャプション評価法」について説明が行われました。

実践編「施設環境づくりの実践報告」では、都市型特養ホーム、築40年の特養ホーム、ケアスタッフと居住福祉工学研究室の協働で進めた特養ホーム、グループホームの4カ所の特徴の異なる施設における環境づくり実践を、取り組んだスタッフが環境づくりステップ1から6に沿って、基本的な方針や具体的な工夫の内容、高齢者の生活やケアスタッフのケア意識の向上について報告されました。

その後、質問紙をあらかじめ配布して、45分間の質疑応答が行われました。質問やコメントの内容を大別すると表2のように、①環境づくりへの職員や管理者のモチベーションをいかに高めるか、②環境づくりの工夫や進め方について詳細な質問、③入居者への影響や対応、④家族や研究者等との連携、⑤個々の参加者の施設状況に関連する課題に大別でき、たいへん多くの質問が出され、講演者から適切な回答がされましたが、まだまだここが聞きたいというご要望があったようです。

3. 参加者の概要

参加者の半数に当たる75名が用意したアンケートに熱心な意見や感想を記入して下さいました。参加者の属性は表3に示すように、ケアスタッフや看護婦を中心とした現場職員が多数を占め、施設管理者、建築、教育、医師、学生、一般企業と多彩でした。環境づくりの経験を過半数が持ち、内容は事故防止のための安全対策、殺風景な施設環境を家具や小物での工夫、ユニット的ケアを目指した家庭的な環境づくりなどに取り組まれていました。中には取り組んだがうまくいかず休止中という方もみられました。参加目的は、「自分の施設でも取り組みたい」、「施設環境に興味がある」がそれぞれ半数に達し、具体的な関心や期待を持って参加していることが伺われました。また、私達のグループが開発したPEAPについて具体的に知りたいが3割近くいることも興味深いことです。ケア現場からの参加者に加え、建築関係者もおり、両学会で共催した意義がみられました。

表2 実践報告への質問・コメントの概要と例示

環境づくりへの職員側の課題

- ・非常勤を含めたスタッフのモチベーションをどのようにして高めたのか
- ・スタッフなど取り組む側の考え方の違いをどのようにして調整したのか
- ・施設内で多職種との協力はどのように図るか
- ・環境づくりはボトムアップで行うことが望ましいが、理解がない施設管理者の意識を上げるには？
- ・環境づくりが負担にならないか、業務の中でどう位置づけるのか、手当などはあるのか

環境づくりやその継続についてさらに具体的・詳細に知りたい

- ・各施設で行われた環境づくりの内容について、どのように工夫をしたのか詳細な質問が多数
- ・勉強会では何をされたのかなど、プログラムの内容をさらに詳しく知りたいという質問
- ・物品を購入する際の注意は、どこで購入できるのか
- ・スタッフが入れ替わっても継続できるポイントは何か

入居者への対応・影響

- ・入居者への説明や参加はどのようにしたのか
- ・環境づくりをして入居者が混乱することはなかったか
- ・異食、収集癖、安全面など困難な行動への対応をどのようにしたのか

家族・ボランティア・研究機関など外部との協力について

- ・環境評価にボランティアなどが参加する場合の工夫について
- ・大学や研究機関と協力した進め方がよく分かったが、競合することはなかったのか
- ・ご家族にはどのように働きかけたのか

参加者個々の課題と関連して

- ・ハードが古くなくても工夫で快適な環境になることが分かり参考になった
 - ・あまり経費をかけなくても、高齢者の生活やケアスタッフの意識が変わることがよく分かった
 - ・入居期間が短い老人保健施設や重度者の多い医療施設での取り組みを知りたい
 - ・個別の痴呆症状への対応の考え方・方法をもっと知りたい
 - ・集団処遇を前提とした従来型の中での改善の取り組みであったが、痴呆固有の対応としての環境のあり方を示してほしい
-

表3 参加者の属性と参加目的

参加者150名中75名回答

| | |
|----------------|---|
| 属性 | 性別 男性 (48.0) 女性 (44.0) 年齢 20～30代 (50.7) 40～50代 (42.7) 60代以上 (4.0) 職種 ケアワーカー (32.0) 相談員 (9.3) 看護婦 (10.7) 建築 (8.0) 教育・研究 (6.7) 学生 (10.7) その他 (26.7) *その他の内訳は、施設管理者・医師・一般企業等 介護・医療職の所属 特養 (30.7) 老健 (8.0) グループホーム (4.0) 一部複数回答 病院 (4.0) デイサービス等 (2.7) |
| 環境づくりの経験 | 環境づくり例 ・転倒・徘徊などへの安全対策 ・ユニット的ケアに取り組み、家庭的な環境づくりを目指している ・ユニットケアを目指したがうまくいかず休止中 ・殺風景な廊下・食堂・居室・デイスペース等を家具や小物で工夫 ・経営的・社会的環境に手を付けたので今後物理的環境改善を ・痴呆性高齢者のなじみの関係と環境づくり ・浴室の改造 |
| 参加目的 (複数回答) | ・情報収集・勉強のため (58.7) ・施設環境に関心があるから (49.3) ・自分の施設でも取り組みたいから (45.3) ・他施設の取り組みを知りたいから (38.7) ・PEAPについて知りたいから (28.0) ・施設計画・設計に関心があるから (24.0) ・その他 (12.0) |

4. プログラム内容の評価

表4に示すように「環境づくりの進め方(午前の部)」について、95%が参考になったとされています。その理由として、「内容が体系だっており、痴呆性高齢者にとっての意義と方法が理解できた」と回答されていました。「環境づくり実践報告(午後の部)」について、87%が参考になったとしていました。「環境づくりの事例が身近で自分たちでも少し努力すれば可能と感じた」と感じて頂けたことはうれしいことです。午前午後とも、パワーポイントによるビジュアルな発表が、分かりやすいと評価されていました。

このような環境づくりに取り組みたいかの質問に関して、7割近くがやってみたくて回答していました。「改善への意欲がわいた、出来るところから取り組みたい」や「中途半端に終わっているユニット化を職員全員でもう一度取り組みたい」という積極的感想が出された一方、「やってみたくて思うが、業務で手一杯の中で周囲の賛同を得ることが難しい」という反応も見られました。

表4 プログラム内容の評価

N=75

| 環境づくりの進め方 | 理由 |
|---|--|
| (午前の部) とても参考になった (72.0) まあ参考になった (22.7) どちらともいえない (1.3) 無回答 (4.0) | <ul style="list-style-type: none"> ・痴呆性高齢者にとっての環境づくりの意義と方法が理解できた ・内容が一貫していること、発表者が聞き手に合わせて工夫していた ・PEAPやキャプションなど具体的な方法を学べた ・実践はしてきたが、その根拠となる理論が分かった |
| 環境づくり実践報告 | 理由 |
| (午後の部) とても参考になった (58.7) まあ参考になった (28.0) 無回答 (13.0) | <ul style="list-style-type: none"> ・取り組みの過程と成果がだいたい理解できた ・環境づくりが職員の意識改革にもつながっていくことが分かった ・具体例を写真等で挙げ、イメージが出来た ・事例が身近で、自分たちでも少し努力すれば可能と感じた ・実際に見学をしてケアとの関連をさらに知りたい ・重度痴呆への実践やグループホームでの取り組みをさらに知りたい |
| セミナー紹介の環境づくりを やりたいか | 理由 |
| 大変やりたい (53.3) まあやりたい (13.3) どちらともいえない (4.0) 非該当 (20.0) 無回答 (9.3) | <ul style="list-style-type: none"> ・現状の環境改善をより体系的に取り組んでいきたい ・改善への意欲が出てきた、出来るところからやってみたいと思う ・介護の学生だが、自分が将来スタッフになったら是非取り組みたい ・方法に楽しさがあるので評価に抵抗のある方も参加しやすい ・利用者に還元されるであろうから ・ユニット化等が中途半端なので、職員全員でもう一度取り組みたい ・やってみたいと思うが、業務でいっぱいの中で難しいと思う |

5. おわりに

前述したように参加者は、施設環境づくりへの具体的・詳細な質問や課題を抱えており、今後とも環境づくりを支援する必要性は高いので、以下のような取り組みを継続したいと考えています。①セミナーの速記録やパワーポイントを基に、早急に施設環境づくり実践ハンドブック2を作成、②日本痴呆ケア学会の特別課題研究(2004~2006)として日本建築学会と連携して、2005年には施設環境づくりの実践的な研修会を実施、③今回の参加者の中で具体的に環境づくりを進めたい方々のニーズを把握して支援を行う、④これらに関する情報は日本痴呆ケア学会ホームページや「ケアと環境研究会」ホームページ(<http://www.kankyozukuri.com/>)等でお知らせをする。

ケア現場の方々の中に高まっている環境への関心、さらに環境づくりを通してケアの向上への期待を今後とも支援し、ともに学んでいきたいと考えています。最後に、熱意あふれる参加者、講演者そして発表会を援助下さった長寿科学振興財団にお礼を申し上げます。